

那珂川町図書館

オススメの1冊

『江戸落語図鑑』 飯田 泰子／著 芙蓉書房出版【779.1 イイ】

着物を着た人が座布団に座り、話す。道具は扇子と手ぬぐい。(上方落語の場合、見台や小拍子なども使用するそうです。) 一人で何役も演じ、リズムよく語られる噺にぐいぐい吸い込まれていく。最後の落ちには笑ったり、思わず涙したり。

落語の起源はいつからなのでしょう。『日本大百科全集』によると、「落語は初めは「はなし」とよばれたが、延宝・天和・貞享(1673-88)のころ上方を中心に「軽口」「軽口ばなし」といわれ、明和・安永(1764-81)のころには江戸小咄の流行とともに「落しばなし」とよばれるようになった。落語を「らくご」と音読することは江戸時代後期に知識人の間で行われていたが、一般的には「落語」と書いて「おとしばなし」と読んでいた。」とのこと。

『江戸落語図鑑』を紹介するにあたり、「江戸落語とは？」という疑問が自分の中に生まれました。落語には、上方(京都や大阪、および、その周辺)で生まれた「上方落語」と、江戸(東京)で誕生した「江戸落語」があるそうで、同じ演目でも上方落語では関西弁で語られるなどの違いがあるそうです。

他にも、落語のジャンルの分け方として、明治期までに作られた「古典落語」と、それ以降に作られた「新作落語」。噺の内容で「人情噺」「滑稽噺」「怪奇噺」等に分類する方法など、いろんな分け方があります。

今回ご紹介する『江戸落語図鑑』について、簡単な説明が本書に掲載されていたので紹介します。

「本書は「図鑑」と銘打っておりますが、働く自動車がずずっと並ぶような正統派じゃありません。事柄のご案内にあたって、それにまつわる絵をふんだんに使い、絵解きをする古典落語の図鑑です。

大まかな作りは、江戸時代の仕事、遊び、暮らしをテーマに三つの章に分け、全五十話の演目を紹介しています。一話四頁で完結するので、興味のある噺が目についたら、どこからでも読み進められます。」(『江戸落語図鑑』より)

江戸時代から語られている噺ですので、現在では聞きなれない物の名前や職名なども出てきます。それらは、それぞれの演目のページに解説や図版が載っています。自分のペースで読み進められるのも、本ならではの楽しみ方だと思います。「いやいや、落語家が話してこそ味がある」という方、当館には落語のCDやDVDもごぞいます。また、那珂川町図書館が所在するミリカローデン那珂川では、年に数回「アマ落語家競演会」なども開催しています。この機会に、日本の伝統文化「落語」を楽しんでみませんか？

参考文献

『桂米團治のみんなが元気になる上方落語入門』 桂 米團治／監修 彩流社

『一冊でわかる落語ガイド』 秋山 真志／監修 成美堂出版